

企画2 オペラ《タメルラーノ》

演奏会批評 (山之内英明氏)

週間オンステージ新聞 2009年1月2日

歌と演奏が曲の魅力伝える

ヘンデル・フェスティバル・ジャパン「タメルラーノ」

今年で第六回を迎えたヘンデル・フェスティバル・ジャパンで、ヘンデルのオペラの佳作の一つである『タメルラーノ』の日本初演(演奏会形式)が行われた。

「タメルラーノ」とは、十四世紀に一代で中央アジアに大帝國を築いたティムールのイタリヤ名。物語の中心は、周囲の人物の恋愛關係をめぐるドラマに置かれている。父バヤゼット(歴史上のバヤジ

デルの音楽を通して細やかに表現されている点に、この作品の最大の魅力がある。

歌手は全員日本人。中でも、メゾ・ソプラノの波多野睦美が歌ったアンドロニコとテノールの辻裕久のバヤゼットが出色。研鑽や舞台の経歴は両人各様だが、二人とも、音程や発声に安定感があるだけでなく、ヘンデルの様式を信頼して歌えているので、情感の表現に無理がないのが共通点だ。辻は、アンドロニコと対話する第一幕第六場や第二幕第七場で特に好演。また、波多野は、第一幕の幕切れや第二幕第八場で苦しい心情を吐露するアリ

アで、この日一番聴き応えのある時の流れを作り出していた。アステリア役はソプラノの佐竹由美が美しい声質で暴君と婚約者の板ばさみで苦しむ役柄をよく表現していた。標題役タメルラーノは山下牧子(健闘していたが、深い情感を伴わない暴君役は、彼女

にとつては損な役どころ。こうした役にはカウンターテナーを充てたい。他に、タメルラーノの婚約者イレーネを背戸裕子、アンドロニコの腹心レオーネを牧野正人が歌った。

渡邊孝は、このフェスティバル専属のキャノンズ・コンサート室内管弦楽団から正確なピッチで深みのある響きを引き出す一方、テンポにメリハリのある指揮ぶりで、長さを感ぜさせなかった。キャノンズ室内管は、日本のピリオド楽器の楽団の中でも若手集団だ。また、裝飾音を交えた渡邊のチェンバロと懸田貴嗣のパロック・チェロの通奏

低音も、的確に歌手を支えていた。耳を澄ますと、十八世紀前半とは思えないほど短調を多用し、繊細な心情を歌うヘンデルの魅力がよく伝わる公演だった。

(十二月六日、浜離宮朝日ホール) 山之内 英明